

古葉 古葉略類聚鈔 神 神田本 西 西本願寺本
 文 金澤文庫本 細 細井本 矢 大矢本
 代 萬葉代匠記 考 萬葉考 玉 萬葉集玉の小琴
 略 萬葉集略解 檢 萬葉集檢搦手 意改 編者の意を以て改めたもの

一、本書の編纂は三人の編者が各巻別に分担を定めて左の如く當つたものであります。
 武 田——巻第五——一〇・一五・一六 計八卷
 澤 瀉——巻第一・二・一一——一四 計六卷
 久 松——巻第三・四・一七——二〇 計六卷

昭和十七年一月

編 者 識

一、今般訂正改版にあたっては大體の結構は元通りであります。若干の歌と注を増補し、訓を改めまた補つたところもあります。

一、挿繪は武藏野書院編集部が担当いたしました。

昭和三十三年三月

編 者 再 識

校注 萬葉集 新選 目次

| | | | | | |
|-------|-------|-----|---------|-------|-----|
| 卷 第 一 | | 七 | 卷 第 十 一 | | 一四八 |
| 卷 第 二 | | 一八 | 卷 第 十 二 | | 一五〇 |
| 卷 第 三 | | 二四 | 卷 第 十 三 | | 一五九 |
| 卷 第 四 | | 四〇 | 卷 第 十 四 | | 一六四 |
| 卷 第 五 | | 四九 | 卷 第 十 五 | | 一七二 |
| 卷 第 六 | | 五七 | 卷 第 十 六 | | 一七六 |
| 卷 第 七 | | 六八 | 卷 第 十 七 | | 一八〇 |
| 卷 第 八 | | 七六 | 卷 第 十 八 | | 一八六 |
| 卷 第 九 | | 一〇〇 | 卷 第 十 九 | | 二〇三 |
| 卷 第 十 | | 一三六 | 卷 第 二 十 | | 二一五 |

百磯城之大宮人者暇有也、梅乎挿頭而此間
集有 （一）

歎舊

寒過暖來者、年月者、雖新有人者舊去、

物皆者新吉唯人者舊之應宜、

權逢

在吉之、里行之鹿齒、春花乃益希見、君相有香

聞

無訓活字本萬葉集卷十(刊本として最古のもの。狛 諸成自筆書入本)久松藏 (本書一三二頁歌)

卷第一

雜歌

泊瀬朝倉宮 御宇 天皇代

大泊瀬稚武天皇

天皇の御製の歌

一籠もよ み籠持ち 掘申もよ み掘申持

ち この丘に 菜摘ます兒 家告らせ

名告らさね そらみつ やまとの國は

おしなべて 吾こそ居れ 敷きなべて

吾こそ坐せ 我にこそは告らめ 家をも

名をも

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代 大泊瀬稚武天皇

天皇御製歌

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫

君志持 此岳爾 菜採須兒 家告閑

名告沙根 虛見津 山跡乃國者 押奈

戶手 吾許會居 師吉名倍手 吾已會

座 我許背齒告目 家乎毛名雄母

△泊瀬朝倉宮—奈良縣櫻井市大字岩坂、黑崎の邊。
△大泊瀬(神)「大泊瀬」雄略天皇。
△大泊瀬稚武天皇—堀串—桑川定一氏「ふかし老」(京都帝國大學國文學會記念論文集)参照。
△家告(考)家吉、家告らせ—澤瀉、萬葉集注釋參照。
△師吉名倍手(玉)「師告名倍手」
△我許背齒(元)「我許者背齒」
△岡本(元)「岡本」
○高市岡本宮—大和國高市郡明日香村大字雷の東か(喜田貞吉博士「帝都」)。

高市岡本宮御宇天皇代 息長足日廣額天皇
天皇、香具山に登りて望國し給へる時、

高市岡本宮御宇天皇代 息長足日廣額天皇
天皇登香具山望國之時御製歌